雨津村における魔障事件報告書

女教師Ａの回顧録

倉田シンジ
表紙イラスト：Mg栗野

試し読み版

二次元ぷち文庫

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『雨津村における魔障事件報告書　女教師Ａの回顧録』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

雨津村における魔障事件報告書

女教師Ａの回顧録

倉田シンジ
表紙／Ｍｇ栗野

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

如月エリ（きさらぎ）

都会の大学を卒業し、故郷に里帰りした新任の女教師。明るい性格で生徒達からの人気も高い。

柴崎夏子（しばさきなつこ）

エリの近所に住む陸上部の少女。快活な性格だったが、ある日様子が一変してしまう。

沢木和哉（さわきかずや）

エリの勤務する学園の生徒会長。

二〇〇九年八月、某県山岳部に位置する雨津村（あまつむら）にて発生した、人間外知的生物による事件、いわゆる魔障事件に関しての報告書より――。

事件に関与したと思われる人物の一人。地域唯一の教育機関である公立雨津高校、およびそこに併設された雨津中学校、雨津小学校の教員である如月（きさらぎ）エリによる証言の抜粋。

以下、この事件に関する資料はすべて秘匿とする――。

「っ、ん……まぶし……」

カーテンの隙間を抜けた初夏の日差しに目を覚まされ、如月エリはゆっくりと目を開いていく。

（もうこんな時間かぁ……）

そのまま枕元の時計に目をやり、ちょうど目覚ましをセットした時間の一分前であることを確かめる。

いつもより少し早い時間なせいか、まだ少し眠い。

しかしそろそろ起きないと、いまにも目覚ましが鳴り出しそうだ……。

「うーん……っ」

ベッドの中で軽くノビをして――エリは起床の決意と共に目覚まし時計へ手を伸ばした。

ジリリリリリリリリ……!!

「んっ、もう……！」

ほんの数秒遅かった。彼女の動きを見透かしていたようにタイミング悪く鳴り出した目覚ましに軽く唇を尖らせながら、それを止め、拗ねるように数秒だけベッドの中でモゾモゾしてから……「よし！」と小さく気合いを入れて勢いよく身を起こす。

如月エリ――今年の春に、過疎の進むこの地方唯一の教育機関である雨津学校に赴任したばかりの女教師だ。

四方を山に囲まれたこの地方は、特に目立った産業もなく、いわゆる過疎地域だった。山岳を貫く街道沿いにあったために昔は旅籠町として栄えていたようだが、時代が変わり、数十年前に大きな道路が他にできてからは過疎が現在進行形で進んでいる。

学校も、名前こそ別々なものの小中高が一緒になった小さな校舎があるだけ。全生徒を合わせても百人に満たない。

シャッ！　と小気味よい音を立ててカーテンが開かれた。

さっと広がった陽光に照らされた肌が、輝くように白さを主張する。

「いい天気……」

女性として平均的な背丈の背中まで流れた長めの黒髪は、起き抜けにもかかわらず癖のひとつもなく、さらさらとした細やかさでパジャマの上を流れている。

スリムな輪郭に穏やかなまなざし、二重のまぶた。すっと細めに通った眉と形のいい鼻

梁、そしてふわりと華が咲いたような唇の印象は数年前に成人を迎えたばかりとは思えない、歳のわりには大人びたイメージ。なのにどこか子供っぽいイメージすらも持ち合わせているのは、さきほどからの行動や言葉にまだまだ少女めいた幼さを感じさせるからだろう。

「ん～っ、いい空気……！」

二階からバルコニーのように張り出した板間に続く窓を開けて、背を伸ばして。新鮮な空気を胸いっぱいに吸い込むエリ。

格安で借りられた借家の二階から見える光景は、澄みきった空の青と、青々とした山の緑がほとんど。その中に散らばるように点在する人家はあくまでもまばらで、他は伸び盛りの稲が揺れる田んぼが広がっていた。

「あっ、先生、おはようございますー」

山裾にあるこの家の周囲には四、五軒ほどご近所さんの家がある。

そのうちのひとつ、この借家の大家さんでもある家の娘さんがちょうど向かいの玄関先で配達された新聞を回収しているところだった。

「ああ、柴崎（しばさき）さん、おはようっ！　いい天気ね！」

手すりに身を寄せ、軽く手を振りながらエリが答える。

女の子の名は柴崎夏子（なつこ）、大家の娘でもあり、エリの教え子でもある。この村落では少な

くなった子供の一人で、学校では陸上部の一員。生徒が少ない学校では部活は道楽も同然で、ほとんどの生徒が無所属だ。その中で夏子はずいぶん熱心な生徒と言える。

毎日練習していることを表すように、その体型はスリムで健康的な小麦色の肌。いかにも田舎の少女らしく、活発でハキハキとしたショートカット少女だった。

その少女が、イタズラめいた微笑みを浮かべたかと思うと、

「先生、胸！　胸！　ブラが見えてるよ！」

近所中に響くような大声でそんなことを叫んだ。

「あ、え？　きゃっ！　そんなこと大声で言わないの！」

寝ている間にパジャマのボタンが数個外れていたのか、手すりから身を乗り出すようにして夏子を見下ろしていた胸元からは、深い谷間とブラの白がむっちりはみ出していた。

「先生、今日から一週間研修なんでしょ？　そんなにだらしなくて大丈夫ー？」

「わ、分かってるわよ、もうっ」

エリは慌てて胸を手で覆い隠しながら、照れたように「しーっ！」と人差し指を唇に。

夏子の言う通り、今日から一週間は県の中央で行われる教育研修のために出かけなければならない。いつもより早めに目覚ましをセットしたのはそのためだ。

「あはははっ！　寂しいから早く帰ってきてねー」

そんな先生の仕草がおかしいのか、夏子は楽しげに笑いながら家の中へ引っ込んでいっ

てしまった。ただ、「寂しいから早く帰ってきてねー」の部分に生徒から慕われている充実感を感じなくもない。

「まったくもう……」

ばつが悪そうにしながら部屋の中へ。

影となる室内からは、夏生地のパジャマが陽光にうっすらと身体のラインを透かせているのがはっきり見える。胸元からきゅっと締まる腰のくびれも、そこから続く引き締まった臀部も、長く細くてスタイルのいい足の稜線も。

慌ててボタンをはめ直した胸元は――張りを誇るように盛り上がって、パジャマの胸元をパンッと張りつめさせている。それは彼女が体つきのわりに豊満な胸を持っていることを物語っていた。

（そろそろ準備しなきゃ……）

今年教師になったばかりのエリは研修が多い。おまけに教師不足でいきなりの担任。新任の宿命ともいえる忙しさが数倍に膨れ上がったが、それがまた楽しくもあった。

ここ、雨津村に唯一の学校は小中高の生徒がそれぞれ二十人から三十人。

さすがに勉強はそれぞれ別の教室を使うが、教師不足と時間割の都合でたまに合同になる。体育のような授業にいたっては初等部も高等部もいつも一緒だった。

そんなわけなので、本来は雨津高校、中学校、小学校とそれぞれ別の名を持つ学校は、

地域の人間からは「雨津学校」でひとくくりにされている。
年度ごとにじわじわと生徒数の減る過疎学校ではあるものの、エリはここに赴任願いを出したことを後悔していない。
それは彼女自身がこの学校の卒業生で、この村の出身であることが少なからずあった。
高校までをこの田舎で過ごし、父母の転職に合わせる形でこの村から引っ越したのは……まだほんの数年前のこと。
都会で暮らし、都会の大学に入学し、そこで教師になることを決意したとき。真っ先に思い浮かんだのはこの雨津村、この雨津学校だった。
エリは自然に囲まれたこの村が好きだった。
いつかまた戻ってきたいとも思っていた。
それが叶えられたことに彼女は満足している。忙しいなどと言ってはいられない。
「……さて！」
朝食も取ったし荷物もまとめて着替えも終えた。準備万端だ。
そろそろ出ないと本数の極端に少ないバスを逃してしまう。日本人形のようになめらかな黒髪を揺らし、エリは玄関へ向かう。
「研修、頑張らなくちゃ！」
わずかに顔を綻ばせながら、彼女は玄関の戸を開けた。

それから一週間、如月エリは教育研修のため雨津村を離れることになった。
予定がびっしり詰まった多忙を極める一週間は、彼女にとってはあっという間だった。
本当に、あっという間に過ぎ去った一週間。
その間に雨津村に起こっていた事件を、彼女は研修から帰ってきて数日の後に知ることになる――。

「如月先生もいないし……あとは自習だなぁ。各々、与えられた課題をちゃんとこなしておくようにな」
そう言った、お爺ちゃんと言っていいくらい年配の教師が教室を出ていく。
生徒数が少ないとはいえ、やはり学校というものはどこもおなじようなものだ。教師が居なくなった途端、教室内はざわつきだした。
「あーあ、如月センセーが研修に行ってまだ二日目か……早く帰ってこないかなぁ」
「まったく、男子はいっつもそればっかだねー」
「当たり前だろ！　娯楽もないこんな田舎で如月センセー以外になんの楽しみがあるんだよ。ぜってー告白する！　帰ってきたら今度こそ告白する！」
「なにそれー！　ムリムリ！　先生からしたら、あんたなんてしょせんガキよ、ガキ」

『ひっ！　あ……きゃあ、っぐうっ！』

異様な光景――少年の顔が崩れたようになり、そこから触手が伸びてくるのを見て咄嗟に漏らした悲鳴。それはすかさず割り込んできた触手に口を塞がれたことで、他の誰かに届くこともなく。

そのまま裏山に引きずり込まれていった彼女は、その化け物に犯され、腹に異質なモノを吐き出されたあげく……解放されたのは夜もずいぶん更けた頃だった。

（あれが夢だったらって……思ったのに……）

保健室のベッドに押し倒されている夏子は、ぼんやりとそう思う。

身体に乗りかかってきた少年によって乳房がくにゃりとひしゃげさせられ、キャミと同じ色のブラが完全にズリ上がった。他の小麦の肌とは違い目に眩しいくらいに白い乳房がぷるるっと震え、綺麗な桃色を浮かせる乳首が頼りなく揺れる。

身体を縛められ、さっきから少年の手の何本もの触手があちこちを撫で回し続けている。

（もうだめ……あたしもう、頭がおかしくなってきてるのかも、しれな……い）

こんな化け物相手に胸を晒し、ブツブツから透明な粘液を流す触手に口を犯され、こんなにも苦しくて気味が悪いのに。

「っぷぁ、は……うぅ……ん」

えっちシーン試し読み

口が解放された途端、粘液でテラテラになった唇から漏れ出たのはそんな甘い響き。
和哉が言う「卵」が腹の中で動いているのを感じる。
ぐにゅんと伸び上がっては子宮の入り口を叩き、ずるりと垂れ落ちてきては膣口の管に貼りつく。ざらざらしているような感触がゴムのような柔軟さで膣壁を擦っている――。
「ふはぁ、あたしぃ……んっ、く……」
だめだ……身体の奥が熱い。どうしようもなく熱せられている。
夏子だって、雑誌の記事を真似して好奇心からのオナニーくらいしたことはある。
でも言われているほどには気持ちよくなかったし、なにか悪いことをしているような気がして続ける気にはなれなかった。そんなものだと思っていた。
なのに……。
「さっきまで泣きそうな顔をしていたのに、もうコレか……ぐちゃぐちゃじゃないか」
少年の声がどこかで響き、次いで脚が広げられる感覚。
横臥のまま、体操選手のように足が持ち上げられている。触手に膝を支えられて、どちらかと言えば犬が放尿するポーズと言った方が近いかもしれない。
「あたしの……アソコ……、っや、見ないで……ぇ」
スカートがめくれて覗いたのは真っ白なショーツ。その中心はすっかり濡れてうっすらした赤い充血を透かせていた。

「嘘をつくなよ。見てほしいんだろう？　犯してほしいんだろう？」
「はぁ、はぁ……ちが、う……」
「違わないな。こうして欲情しているじゃないか。お前の身体はもう、俺に……化け物に犯されることを覚え込んでるんだよ。一生忘れられない、麻薬のような悦びを」
鍛えられてきゅっと引き締まった太腿は、短パンの形をハッキリと残して日焼けしている。その艶めかしいほどの肌を、たらたらと愛液が滴っていた。
「魔物に犯された人間はその快楽が忘れられなくなる。俺から離れられなくなる。お前もすぐそうなるんだ……昨日の夜のように」
（昨日の、夜……？　そうだ、あたし無理やり犯されて、それで……）
さっきまで胸の奥に隠していた記憶が蘇ってくる。
処女を無理やり奪われ、酷い扱いを受けたのに……そうだ、あたしは――。
解放される直前まで触手と和哉のペニスで身体を抉られていた夏子は、最後は涙を流すほどに快楽に溺れ、処女を失ったばかりとは思えないほどに甘い声を張り上げていた――。
『もっとぉっ！　ふぁ、んっ、っはぁぁ……、ソコぉ。すごいいぃ、おま○こ気持ちいいよぉ……！　おま○この奥でっ、うねってるううっ！』
そのときに自らが叫んだ信じられない言葉も一緒になって思い出した。
（ああ……そっか、あたしとっくに……）

ふっ、と身体から力が抜けた。こわばっていた手足はだらりと弛緩し、ベッドに横臥する身体もくにゃりとしなだれるように。

「でも喜んでいいよ。まだまだ快楽が足りないようだから、頭の中がこの感触で一杯になるまで犯してやるよ。明日も、あさっても、毎日じっくりと……」

和哉だったものにかけられた死刑宣告のような言葉。

なのにそれが悪いことのようには思えない自分がいる。その証拠に、さっきから広げられているアソコがウズウズしっぱなしで――。

撫でるように内腿を這いずっていた触手の中にひときわ硬いモノを感じて、ズクンと子宮が跳ねた。

「あ、ぅ……」

揺らめいた夏子の視線が捉えたのは自分の股間に擦り寄る和哉のペニス――彼の身体と同じく、人間のものとは思えないような形に変形肥大したものだった。

ぺたりとショーツに貼りついた触手によって、邪魔なショーツがずるりとすべる。羞恥心と恐怖と、期待と不安と、いろいろなものが混じりあった感情が湧いてきて、少女はきゅっと唇を噛んだ。

最低限の処理しかしていなかった、剛毛と言ってもいいくらいの茂みの中……それとは対照的な楚々とした二枚の肉貝が潜んでいる。

開かれた股間に引っ張られてパックリ開いた二枚貝は充血し、小さいながらにヒダを広げてテカテカに照り光っていて……そこから覗くのは新鮮なピンク色の内側と、涎を流しながらヒクついている小さな膣口の陰り。

そこは少女の歳には不似合いなほどの淫靡な趣をたたえていた。

ぷちゅ、ずず……くちっ！

「んあぁ……っ、いりぐちっ、当たって、る……う」

怯えとも感嘆とも、どちらともとれる震えた声。

その天秤の均衡はすぐに……少年のペニスの不気味なほど膨れた亀頭侵入によって、ハッキリとした傾きを見せ始める。

にじゅ、ぷぷぷぷ……ぐちっ、ずるるるんっ……！

そんな大きさにもかかわらず、にゅるん！　と勢いよく亀頭を飲み込んだ膣口。異物をくわえて卑猥な形に広がった穴が一気に締まって、ヒクヒクした痙攣を起こす。

「ひぁ！　あ……！　ああ、これぇ、昨日と同じっ……っはぁ！　いっぱいにっ、お腹のなかがいっぱいに、なってくぅ……！」

蘇る昨日の記憶が現実にオーバーラップし、頭の中が混乱していく。

耐えがたい恥辱、こらえられない恐怖、そんな感情だけが薄れていき、代わりにムクムクと首をもたげてくる期待感。切迫感に満ちた疼きに、背中がゾクゾクする――。

（もう、いいや……。あたしが悪いんじゃない、こんなの、どうしようも……な……い）
ゆっくり入り込んでくる肉棒の表皮が波打つように瘤を浮かせ、膣ヒダをゾリゾリと掻き擦っている。それがたまらなく心地よくて、もどかしくて……。
「はっ、はやっ、くううっ！　奥までっ！　早く入れてよお……っ！」
少女はそう叫ぶや自ら腰を持ち上げた。ちょうどそれを待っていたかのように、大きく突き出された人外少年の腰と合わさってペニスは一気に。
ずるんんっ！　ぐぶちゅうっ！
「あは……あ、ひゃうぅぅんっ！　すごいいぃぃ……っ」
ゴリゴリと身体の奥を抉られる感覚――快楽の大波にさらわれた少女は、その頬をだらしなく緩め、まぎれもない歓喜の表情を浮かべていた。

泊まりがけの研修日程を滞りなく終え、エリは久しぶりに村へ帰ってきた。
たった一週間とはいえ、まったく教え子たちの顔を見られないとなると不安になる。ましてや新任ともなると、子供たちの顔以上に自分が授業の仕方を忘れてしまいそうで……というのがエリの本音だった。
とはいうものの、
「じゃ、今日はこれで終わり。みんな気をつけて帰ってね」

（私は先生だから、ちゃんと授業しなきゃ、だめなのに……）

しかし、生徒たちが男女ペアになって睦みあっている様子を見ると、その仲の良さが伝わってきて……そのままでもいいような気がしてくる。

「柴崎って、こんなにいやらしい身体してたんだなぁ」

「あふ……む、褒めても、なんにも出ないよぉ……んぐ、ちゅ、ぷちゅうっ」

近くには全裸に近い夏子がいて、ぼんやりした表情をわずかに笑ませ、日焼け跡を残した腰をくねくね揺らして男の上に乗っていた。その片手には別の男のペニスを掴み、涎をまぶしてあげている。

そのすぐ向こうには彼女の親友、山川さんが四つん這いになって尻を振っているのが見えた。彼女を犯す男の子も、その他も、みんな見知った顔だ。

「ああ先生、目を覚ましたのかい。もう、この教室の女には全員卵を植えつけたよ」

「……？」

和哉だ。でも、言われていることはよく理解できない。頭の中に靄（もや）がかかっていて……。

「そろそろ頃合いだと思ってね。今日中にはこの学校を支配下に置ける」

だめだ。大事なことな気がするのに、核心が思い出せない。

「思い出せないようだね？　まあいいさ、この霧が晴れればいずれ思い出す。そして僕を恐怖するんだ。もう、どうしようもないんだってね」

ちっちシリーズ 試し読み マンガ パラパラ!

（……霧？）

そうだ。よく見ると教室の中にうっすらと靄が立ちこめている。ハッキリしないのは頭の中だけじゃない。視界もだ。

「先生の痴態を呼び水にして僕が引き寄せた淫霧だよ。男も女も、まぐわうことしか考えられなくなる。あとで正気に返ったときには、もう僕に逆らえなくなっているんだ」

やはりよく分からない。それよりもいまは――。

「んッ！　はぁう……ああ、おっぱい、もっと吸って……ぇ」

「せっ、せんせぇぇ……！」

仰向けの自分にのしかかってくる、この生徒の方が気になる。さっきから執拗に吸ってくれる乳首がとっても気持ちいい……でももっと、おま○こも貫いてほしいから……。

「あっ、ん……ねぇ、おっぱいだけじゃなくてこっちも……、一緒にぃ……」

自分から足を開いてみせると、必死になって腰をすりつけてくる。硬くておへそに付きそうなほど反り返ったペニスがすぐに中へ押し入ってきた。

「センセイッ、うっ、先生の中、気持ちいいよっ……！」

「あなたのも、硬くて気持ちいい……っ、んんっ、ソコ、奥のほうっ、先っぽで擦って……っあああん！」

準備のすっかり整っている私のアソコが、凄く硬いペニスで抉られていく。ぐちゅぐち

ゆで、ゾクゾクして、とても気持ちいい……！

「先生のは特別気持ちがいいからね……くくっ」

和哉の顔の半分がぐにゃりと歪んで、そこから触手が伸びてきた。それが空いた方の乳房を根元から締めつけてきて、先端に飛び出たコリコリの乳首を挟み込んでくる。

「ひっんんん……！　ああ、すごいぃ……身体中こんなにっ、きもちいいっ」

我慢がきかなくって、のしかかってくる男の子の腰に足を絡めた。そのまま引き寄せるように自分で腰を振りたくると、密着した腰の奥でペニスがビクビク震え始める。

どくっ、どぷぷぷ、ぶじゅるるっ！

「んんっ！　だ、出してるの……？　精液、奥に出してるのね……？」

自分の身体で気持ちよくなってくれたことが嬉しくて、射精中の男の子に舌を伸ばした。応じて舌を伸ばしてくるのを唇でくわえて吸ってあげると、膣内のビクビクが最後のひと跳ねで子宮口を叩く。ゾクッとしたものが走り抜けて私も軽く絶頂を感じていた。

「先生と夏子はそろそろ卵が孵るはずだ。僕が最後の一押しをしてあげるよ」

男の子と入れ替わりに和哉がのしかかってきた。股間に当たるのはあの太い感触……忘れようのない、あの極大の快感をもたらしてくれるペニスだ。

「ああっ、早くっ、それっ欲しいの……！　早く入れてぇ……！」

「慌てるなよ……そういえば先生、初体験はいつだっけ？」

「初体験……初めてオチンチンをおま○こに入れたの……大学生のとき……」
「こんなに気持ちのいい穴を、ついこの間まで使ってなかったのか。もったいないなぁ」
「んっ！　こんなに気持ちいいの、知らなくてっ、く……あはぁぁ、入ってきたぁ……」
すっかり太さと形を覚え込んだ私の膣肉が、悦びの吸いつきをみせて大きな亀頭に絡まっていく。あり得ないカリの段差も、肉棒のぶつぶつに擦られる快感も、すっかり身体に染みついている。先端部分を入れられただけで全身が反応して悦びが広がっていく。
「それで、その相手とはそのあとどうしたの？　ヤリまくったんだろ？」
和哉はまだ根掘り葉掘り聞こうとしてくる。あまり思い出したくない部類のことだった気がするけど、言わないと入れてくれそうになかったので仕方なく話すことにした。それくらいで入れてもらえるなら安いものだから。
「二日に一回は、してたけどっ、その人が事故で死んでしまってっ。だからっ……もう、こんなことはしたくないって、思ってたけどぉ……っ」
「癖になっちゃっただろう？　その男も残念だったろうなあ。先生のおま○こをもう二度と味わえないなんてさぁ……」
ぐりっとねじり込まれた亀頭が一気に深くまでやってきた。縮まろう縮まろうとする膣壁とブツブツ亀頭が擦れあって、ものすごく気持ちがいい。
ゾクゾクが止まらなくて、身体が勝手にくねくね動いてしまう。

「うくっ、んんっ、はぁ、はぁ……すごいの、このペニスっ、ぴったりぃ……」
初めはあんなに大きくて入れるなんて無理だと思っていたペニスが、いまはこんなにも気持ちいい。他のことはもうどうでもいい――。
「僕も気に入ったから先生を大事にしてあげるよ。何度も何度も犯して、何度も何度も卵を植えつけてあげるからな」
「んうっ、犯してぇ！　早くっ、いっぱい動いて……ひぁぁっ！」
ずぬるるるっ……ずぶちゅううっ‼
和哉は私の言葉が終わるのを待たず、いったん引き抜いたペニスを思いきりねじ込んできた。途端に私の意識は弾け、もう、快楽しか考えられなくなっていった――。

「ひゃあっ！　んぐ、はぁ、あうううっ！　気持ちいいっ！　おま○こイイっ！」
膣口が一気に締まり、抽送されるペニスの凹凸に引っかかってめくれ返る。そのたびに愛液がぷじゅっ、ぷじゅっとしぶいて、まるで潮を吹いているかのようだ。
いつの間にか周囲には他の男子生徒も集まっていて、血走った目でこちらを見下ろしている。まるでこれから起こることを知っているかのように。
みな、その股間をガチガチに屹立させてエリを見下ろしていた。
それを目にしたエリの舌が、自然と伸びて宙に突き出される。仰向け姿勢で届きそうも

ないペニス群に舌を這わせるように、突き出された舌がチロチロと宙を舐め、涎を垂らす。
「あはぁ……んむ……」
その動作に誘われて降下してきたペニスの群れに、彼女の顔面は一瞬で埋まった。
口内へ飛び込んだペニスを必死に吸い寄せ、その内の一本をあむっとくわえ込んでズルズル吸い上げ……若い青臭さを胸いっぱいに吸い込む。
「あはぁ、おいしいっ……おちんちん、臭くておいしい……の」
うっとりする表情はさらに蕩けて。仰向けではろくに頭を動かすこともできないのに、貪欲にも両手に一本ずつを掴み、パン食い競争のような必死さでむしゃぶりついていく。
「卵は充分育ってるな……すぐにも孵化しそうだよ」
「はぁ、んうっ、さっきから、お腹のなかで……モゾモゾしてりゅ、んぐ、じゅぷぷっ」
ぐちぐちと出入りする極太ペニスの先端、さらに奥にある子袋に巣くった卵。それがさっきから蠢いていて心地よい振動を与えている。
生徒たちのペニスも、和哉のペニスも、腹の中の卵も、すべてが愛おしい。
すべてが気持ちいい。
「んっ、ソコぉ、ひゃうっ！　ああっ、クリトリスぅ、きゅってつまんでぇ……！」
細い触手がちゅるっと巻きつくような動作で包皮を剥き上げ、ぷりぷりした陰核を先端で押し潰す。ひしゃげた肉豆は鋭い快楽を発して、エリの身体に頂点の前兆をもたらした。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/